

２００８年もういよいよ終わりを迎え、また新たな年に向け、この一年がどうであったか。

アメリカのサブプライムローン問題に端を発した金融危機、後を絶たない殺人事件等々、皆様におかれても悲喜こもごもいろいろな思いでお過ごしになられたことでしょう。

私においても５０という歳を迎え、いろいろな思いが去来した一年でありました。特に先月１１月、あるご門徒が亡くなられ、その人のお宅にお伺いし枕経をお勤めしていると、急に涙があふれ出し、嗚咽でお経にならない有様でした。思えば、その方は農業をしてみえて、「ごえんさん、ナスはあるかね？白菜はあるかね？大根が採れたで」と、事あるごとにいただいております。

また、大輪の菊を育てられ、３０年来その菊を報恩講の仏花に使わせていただいているのです。丹精に育てられた菊を見頃になった時にチョッキン、チョッキンと切ってしまうのです。菊を作っている人は沢山みえますが、見頃の時に切らせてもらえる人は他にはありません。申し訳ない気持ちで、最小限でと思って切っていると、「遠慮しないでもっと持っていきやあ」と言われ、その言葉に甘えていたのです。１０月頃に体調を崩され、病院にお見舞いに窺った時にも、私の寺の報恩講の前であったということもあり、「だつ（ずいき）があるから持ってってよ」と、自分の体調のことよりも報恩講のことを気に掛けてくださるのです。

そんなことがあってか、泣くつもりはなくても涙が止まらない。申し訳ない気持ちで息子さんに、「本当にお世話になってありがとうございました。お礼のしようもなく」と言うと、「父はお寺のために喜んでやっていたから」と言われるのです。

昨今「寺のあり方」についていろいろ議論がされる中、こんな人が居てくださったんだと思うと、また胸にこみ上げてくるものがあります。